



欲張(り)権造

作：風見 不貳王

『欲張り権造』

昔々、ある所に、備房村（びんぼうむら）と言う、とっても貧乏な村がありました。

田畑はすべて痩せこけて、何を植えようが健やかに育つこともなく、山が紅く染まる収穫の秋が訪れても、豊作など夢のまた夢。村人達が秋祭りで賑わう姿も、どの年も見る事が出来ませんでした。

さて、この村には、権造という若者がおりました。

この権造は、村の者なら誰もが知っている、村一番の欲張り者。

小さい頃から欲深く、その欲の皮の突っ張っていることときたら、古今東西、類を見ない程。

食事をすれば、ちょっと目を離した隙に、親の分や兄の分まで盗んで喰ってしまう。そのくせ自分の分を、腹を空かせた幼い弟達に分けてやるなんてことは、金輪際しやしない。

親に使いを頼まれれば、駄賃をねだる。

人に道を訊かれれば、案内料を取る。

他人の物は黙ってでも借りるが、自分の物は一切貸さない。

「他人の物はオラの物、オラの物はオラの物」という頑なまでの生き様は、子供だてらに見事とも言える程の徹底振りでありました。

青年になってからも、権造の欲の張り様には磨きがかかるばかり。

歳の暮れに、若者衆でなけなしの餅米を持ち寄り餅をついたはいいが、ついた側から権造がつまみ食いするので、つき上がる頃には餅が無く大騒ぎ。

隣の婆様に、わずかに生った柿を穫るよう頼まれれば、穫った柿を一個だけ婆さまに渡して、残りを全部手間として取ってしまう。

他人の為にタダで手伝いなど、したためしが無い。

「タダでえ働くなんでえ、たんだの阿呆だあ」

くらしいことは平気で言っただけ、正真正銘、筋金入りの欲張りでありました。

そんな権造がある日のこと、山の中へ山菜採りに出かけました。

鉈で邪魔な蔦や枝を薙ぎ払い、藪の中を掻き分け掻き分け進んで行くと、少し開けた所に蕨の群生を見つけました。

欲の皮をば丸出しに、喜び勇んで片っ端から蕨を刈っていく権造。

刈っては背中の中籠にポイッ！

刈っては背中の中籠にポイッ！

まだまだ蕨は沢山生い茂っています。

何十回目かの、蕨をポイッと投げた時でした。足元の注意がおろそかになっていた権造は、草に足を取られて、山の斜面に転がり落ちてしまいました。

ごろごろごろごろごろごろごろ……

どこまでも、どこまでも、転げて落ちて行きます。

転げるうちに、蕨の詰まった籠はどこかに飛んで行ってしまい、権造だけが、ごろごろごろごろ……、と、転がり続けました。

権造が百ぺんも目を回した時、ようやく大きな木の幹にぶつかって止まりました。

「あいだだあ……、とおんでもねえ、ひでえ目にあっただあ……」

あちこち擦りむいたり、ぶついたりした身体を擦っていると、いきなり頭の上に何かが落ちてきました。

「ひえっ！？」

驚いて咄嗟に頭の上から振り払った物を、よくよく見ると……、

なんとそれは、真っ黒なカラスでした。

「なんでえ、カラスけえ……、ああ、びっくらこいだあ！」

権造が胸を撫で下ろしていると、そのカラスが足元にぴよこぴよこと近寄って来ます。

そして権造の顔を見上げて、

「ガアッ！」

と、一鳴き。

「なっ……、なんでえ、おめえ?! オラさ文句でもあるだか?!」

「ガアッ! ガアッ!」

カラスは権造の顔を見上げたまま、鳴き続けます。

「ああ、ああ。オラが悪かっただよお! 木にぶづがっでえ、びっくらさせちまっただな? 勘弁してくんろ」

そう言って権造が詫びると、

「ちっがあーう! ちっがあーう! 拙者は、お主に礼が言いたかっただけでござる! があ!」

突然に言葉を話し出したカラスに、権造の目は真ん丸になりました。

「こらあ、ほんにい、ぶったまげただなあ! カラスがあ、言葉しゃべっとるわいっ!」

カラスは、ぴよんと更に権造に近づくと、再び口を開きます。

「そーれも、ちっがあーう! ちっがあーう! 拙者は、ただのカラスにあらず! 鴉天狗でござる! があ!」

そう言うや否や、カラスはひょいと跳ねて宙返り。

カラスの身体は、ぽんっ!と、四、五歳の童程の大きさになり、山伏装束の鴉天狗の姿に変わりました。

「あいやあ! こりやまたあ、ぶったまげたーっ!」

頭には、頭襟（ときん）を冠（かぶ）り、首からは六つのフサの付いた結袈裟（ゆいげさ）を下げ、右手には錫杖（しゃくじょう）を持ち、左手には念珠（ねんじゆ）と法螺貝（ほらがい）と、まあ一見、修験者のような、真にたいそうな出で立ちでありました。

「拙者、名は鷲儂（がるだ）と申す。鴉天狗ともあろう者が、恥ずかしながら、油断した所を鳥捕りの網に捕われていたでござる。

危うくこのまま日干しになろうかというところ、お主のお陰で助かったでござるよ。

ここは是非とも命の恩人に名乗りを頂き、我が里に招いた上で礼をさせてもらわねば、鴉天狗の名が廃（すた）るといふもの。があ!」

どうやら、権造が木にぶつかったお陰で、鴉天狗は罨から逃れる事が出来たと言うのです。

そうと分かれば話は早い。

「オラ、備房村の権造だあ。そうまで言うなら、せっかくだから礼してもらおうべ」

根っからの欲張り者の権造の事、お礼欲しさに、一も二も無く、二つ返事で鴉天狗に付いて行く事にしました。

「ほれ！ 早よ連れてけ！ 早よ、早よ！」

命の恩人と言われ、その態度さえ少々大きくなる始末。案内する鴉天狗の後ろには、ふんぞり返る権造の姿がありました。

この手の話の成り行きでは、大抵は宝の葛籠（つづら）の一つも貰えるもの。権造は何が貰えるものかと、意気揚々と鴉天狗の後ろに付いて行きます。

しかし、山を一つ越え二つ越え、行けども行けども、登れども登れども、なかなか鴉天狗の里には辿り着きません。

「ひいっ……、ひいっ……、オ……オラ、もう歩げねえだ……」

日も傾き始め、権造が音をあげかけた頃、ようやく目の前の景色が開けました。

その刹那、権造は息を飲み言葉を失いました。

山の頂き辺り、権現造りの神社を中心に、これは極楽浄土かと思う程の美しさで広がる鴉天狗の里。

紅く染まった夕焼け空の背景が、なお一層のこと、それを幻想的に権造の目に焼き付けたのです。

さて、鶯鴫と権造を迎えた鴉天狗の里は、大騒ぎになりました。

多分に演出された〈鶯鴫脱出の巻〉を聞かされて、長老や里の衆が大感激。

珍しい客人という事も相まって、里の者総出で権造の歓迎の宴を催す事になりました。

その晩開かれた歓迎の宴たるや、秋祭りさえ経験した事の無い権造にとっては、これぞ竜宮かと思わせる程の、真にきらびやかな宴でありました。

目の前の立派な能舞台で繰り広げられる狂言。

膳に盛られた、生まれてこの方、味わった事の無い豪勢な御馳走。

脇に控えた女子（おなご）が酌をする、まるで舌をとろかすような酒。

何もかもが夢心地。

酔いが回った権造は、隣に座っていた鶯鴫の手を取り、上機嫌な千鳥足で踊り出しました。

場は一段と盛り上がり、鴉天狗達も皆、笛太鼓に合わせ踊ります。

そうして、夢のような夜は更けて行きました。

賑やかな鳥のさえずりに権造が目覚めると、障子に暖かな陽が射し込んでいました。

権造は、立派な座敷に敷かれた床の中から身を起こします。

「いでで……、頭がいでえ……」

明け方まで、呑んで唄って踊って騒ぎ続けたせいで、見事な二日酔い。喉さえ少しヒリヒリとしていました。

だが、どうやらすでに日は高い位置に有るようです。こうしては居られません。さっさと帰り支度をしなければ。

権造は慌てて飛び起きると、障子を開けました。

まぶしい陽が権造の目を眩まします。

「おや？ 権造殿。目を覚まされたでござるか。があ！」

昨晚の宴の後片付けをしている鶯儂駝でした。

「オラ、村さ帰るだ。」

「えっ？ もっと、ゆっくりして行けばよろしいでござるよ。があ！」

鶯儂駝は手を止めると、慌てて権造の側に寄りました。

「いんや。きっと皆、心配しとるだ。オラ、帰る！」

「そうでござるか……。があ……」

きっぱりとした権造の言葉に、鶯儂駝はとても残念そう。

「では、是非とも土産をお持ち下され。があ！」

「土産?!」

土産という言葉に、権造の表情がくるりと変わります。

「何が貰えるんだべか？」

「拙者に付いて来るでござる。があ！」

慌てて草鞋（わらじ）を履き、鶯儂駝の後を追う権造。

いくつかの小さな家屋の間を抜けて行くと、目の前に整然と手入れされた林が現れました。

よく見ると、どうやら桃園のようです。

立派な木々から広がる枝には、頃合いも良く熟れた桃が幾つも生って、その瑞々しく張り詰めた実の重さで、枝をしならせています。

まるで一面に桃色の雪洞（ぼんぼり）を吊るしたような美しい光景に、権造は、しばしの間見とれてしまいました。

「なんてえ、綺麗なんだべか……」

桃園に見とれる権造に、鶯儂が得意満面で言いました。

「これはタダの桃ではござらぬよ！　があ！」

「えっ？　銭を取るだけか？」

「いやいやいや、そういう意味ではないでござる。があ！」

権造の勘違いに、鶯儂は苦笑い。

「なんと、この桃園の桃は、桃源郷（とうげんきょう）由来の仙桃（せんとう）でござる！

があ！」

「桃源郷？　仙桃？」

そう言われても、桃源郷も仙桃も知らない権造には、普通の旨そうな桃にしか見えません。

「異国の地の、人が踏み入れぬ山奥の、そのまた奥に有る仙人の住まわる所、それが桃源郷でござる。があ！　はるか彼方の、その地より伝わりし、真に有り難き果実、それが仙桃でござる。があ！　その実を一口食べれば、ありとあらゆる病もたちどころに……」

自慢げに蘊蓄（うんちく）を述べる鶯儂にたまりかね、権造が話途中で遮ります。

「ああ！　ああ！　わかっただ！　わかっただ！　とにかく有り難い桃なんだべ？　sonだけ有り難い桃なら、きっと高く売れるにちげえねえ。た一んともらうべ！」

そう言うと、さっそく権造は桃をもぎり穫り始めました。

「さあ、好きなだけ持って行くでござるよ。があ！」

鶯儂は、大きな籠を一つ用意しました。

桃を、どんどんどんどん籠に放り込んでいく権造の勢いは止まりません。あっという間に、籠はいっぱいになってしまいました。

「もう一つ籠を取ってけろ！」

「籠でござるな。ほいっ、権造殿、ここに置くでござるよ。があ！」

鶯儂は、二つ目の籠をにこやかに置いてやりました。

すると権造は、またもや、どんどんどんどん桃を籠に放り込んでいきます。

それから間もなく、また権造の声がしました。

「もう一つ籠を取ってけろ！」

鶯儂は、三つ目の籠をにこやかに置いてやりました。

しばらくすると、またまた権造の声が……。

「もう一つ籠を取ってけろ！」

鶯儂は、四つ目の籠をにこやかに置いてやりました。

そして、また、しばらくすると……。

「もう一つ籠を取ってけろ！」

もう、きりが有りません。

その度に鶯儂は、にこやかに籠を置いてやりましたが、さすがに三十も籠が並んだ頃には、その顔は引きつっていました。

「ご、権造殿……。まだ、終わらぬでござるか？ があ……」

鶯儂は呆気にとられ、顔には冷や汗が流れています。

「ちょっと待ってくんろお。こーれでえ、終わりだからあ」

そう言って権造は最後の一個を、三十番目の籠のてっぺんに置きました。

鶯儂があらためて桃園を見渡すと、いっぱい雪洞で賑わっていたはずの景色が、なんとも寂しいものに……。

鶯儂の目には、仙桃の影は一つも見当たりませんでした。

呆然として突っ立っている鶯儂に権造が一言。

「大八車（だいはちぐるま）が要るだな」

長老の命（めい）により、鷲鷹ともう一人の鴉天狗が権造を村まで送る事になりました。
別れを惜しむ里の者達に暇（いとま）を告げると、桃の籠が三十も積まれた大八車の車輪が、
軋みながら回り始めました。

権造が大八車の前を引き、二人の鴉天狗が後ろから押します。

手を振る鴉天狗達の姿がだんだん小さくなっていき、夢のようだった里の景色も、次第に山
の木々に覆い隠されていきました。

山を、
下って下って……、
登って登って……、
下って下って……、
登って登って……。

とうとう最後の山を登り詰めた時でした。

ガタンという音と共に、大八車は前にも後ろにも動かなくなってしまいました。

見ると、車輪が大きな石に乗り上げています。

ここさえ乗り越えれば最後の下り坂。村までもう少しの所です。

三人は声を合わせ、力を振り絞りました。

「いーち、にーい、のお、さーん！」

大八車はガタンと石を乗り越えて、ゆっくりと動き出しました。

後ろで押していた二人のカラス天狗は、手を取り合って大喜び。

ところが、石を乗り越えた時の弾みで、積まれた桃の籠が少し後ろ側にずれて、大八車の前側
が持ち上がってしまいました。

前で大八車を引いていた権造も一緒に持ち上げられて、慌てた足がバタバタと空を蹴ります。

下り坂に差し掛かった大八車は勝手に走り始め、ガタガタと揺れながら、どんどん速さを増し
ていきます。

権造は持ち上げられたまま、足をバタバタ。

ガタガタ、どんどん、バタバタ……

ガタガタ、どんどん、バタバタ……

ガタガタ、どんどん、バタバタ……

「あんなに急いで、権造殿はよっぽど村が恋しかったのでござるなあ。権造殿っ！ 達者で暮らすでござるよーっ！ があ！」

坂の上から驚儂駝たちが手を振ります。

一方、権造はと言えば……。

「うおおおおおおおっ！！ たっ、たっ、たっ、たすけてくんろーっ！ 誰かーっ！ 止めてくれろーっ！！」

という叫びも虚しく、暴走する大八車は止まりません。

備房村へとまっしぐら。

山の麓（ふもと）で野良作業をしていた権造の幼なじみ、孫六の傍らを、桃を山積みにした大八車が疾風の如く駆け抜けて行きます。

「ん？ 権造の声が聞こえたような気がしたが……。うおっ？ ありゃいったい、なんだべか？！ 風神様のような勢いで走っていくぞい？！」

大八車にぶら下げられた権造の顔が歪んでいるのは、受ける風圧の為か、はたまた恐怖の為か、それは定かではありませんが、その行く先に待ち受ける、人の丈程もある大岩は、間違いもなく迫り来るのでありました。

疾風の速さで山を飛び出した大八車は、そのままの勢いで大岩に激突しました。

それと同時に、大八車はもんどりうって、空中で大回転。

権造は投げ出され、桃は村じゅうに散らばって飛んで行ってしまいました。

「あいででで……。すんげえ、おっかなかっただ……。あら？ オラの桃はどこだあ？」

周りをいくら見回しても、桃は一個も見つかりませんでした。

がっかりした権造は肩を落として、トボトボと家に帰って行きました。

明るく朝、備房村は大変な騒ぎになっていました。

痩せてろくな米が出来なかった村じゅうの田んぼが、なんと一夜にして、黄金色の敷物のような稲穂で埋まり尽くしていたのです。

それだけではありません。

石ころだらけで、ろくに耕されてもいなかった畑が、見違えるような、ふうわりとした柔らかい肥えた土に変わって、様々な作物が賑やかに、その色とりどりの瑞々しい恵みを、たわわに実らせていたのであります。

村の人々は皆、口を揃えて不思議な事を言っていました。

前の日の夕刻、突然空から桃が降って来て、田畑に落ちて、びちゃっと飛び散った。

その桃は、土に吸い込まれるように消えたが、一晩明けたら田畑が見違えるような事になっていた。

あの桃は、きっと神様が、あまりにも貧乏なこの村を見かねて、天から落としてくれた物に違いない。これでたらふく飯が食える。ありがたや、ありがたや。

と、まあ、だいたい村人達の言っている事は、この様なものでした。

そこへ丁度、孫六がやって来ました。

村人達の話聞いた孫六は、実はその桃は権造が村じゅうに撒いた物だと言いました。

「へええっ！ あんの権造があっ？！」

と、普段の権造を知る村人達は驚きましたが、ならば権造に礼を言わねばなるまいと、権造の家へと押し掛ける事になりました。

そんな事とはつゆ知らず、蕨も桃も全て失ってしまった権造は、落胆のままに布団の中で臥せていました。

権造の両親は、押し寄せて来る村人達を見るなり、

「お前っ！ また、なんか、しでかしたただかっ！」

と、権造を叩き起こして問い詰めましたが、心当たりがあまりにも有り過ぎる権造は、さて、どの事だろうかと、腕を組み首を傾げてしまいました。

そうこうしているうちに、気が付くと家の前には、米やら餅やら団子やら野菜やら果物やら、何やらたくさんの食べ物を持った村人達の行列が出来上がってしまいました。

あまりの事に、何が起こったのかと呆然とする権造とその家族。

そんな事はお構い無しに、村人達は入れ替わり立ち代わり、お礼と共に沢山の食べ物を置いて帰って行きました。

ようやくの事で行列が片付き、権造は村の様子を見に家の外へと出てみました。

村の様子は一変していました。

「こりゃ、おったまげた！ あんだけ痩せてた田畑が……」

どちらを向いても、ふかふかな土から勢い良く生い茂った作物が、色とりどりの弾けそうな実を、所狭しとばかりに実らせています。

田んぼでは、大人達が力を合わせて見事な黄金色の稲を刈り、子供達が仲良くそれを運んで、犬がその周りを駆け回っています。

穏やかに、どこまでも高く青い空の下、楽しそうな話し声と笑い声が、緩やかな風に乗って、絶え間無く聞こえて来ました。

「皆、幸せそうに笑っとる……。こんなの初めて見ただあ……」

権造は呆気にとられたまま畦の草の上に腰を下ろすと、しばらくその風景に見とれていました。

「なあんか……。ええなあ……」

不思議な事に、目頭と胸が熱くなって来ます。

権造の心の中には、今まで味わった事の無い気持ちが湧きあがって来ていたのです。

きっとそれは、嬉しさであり喜びであり、感動であったのかもしれませんが。

「うん！ なんかええ！」

涙の筋がついた権造の頬には、笑みが浮かんでいました。

「そうだ、オラ、なんか皆の笑顔が好きだ。もっともっと、皆の笑顔が見たいだ。皆の幸せそうな笑顔が欲しいだ！」

欲張り権造は、村人達の幸せな笑顔が欲しくなったのです。

それからというもの、権造は人が変わったように働きました。

人手が足りず困っている人には、タダで喜んで力を貸し、自ら作った作物を皆に配って回り、率先して餅をついては、皆に食べさせる。

隣の婆様の庭に柿が生れば、丁寧に干し柿を吊るしてやり、ついでだからと、肩さえ揉んであげました。

泣いている子供が在れば、あやして笑わせ、病気に苦しむ者が在れば、寝ずに看病をしてやり、年老いた神主様に代わり、神社の掃除も毎日行いました。

以前の権造とは、似ても似つかぬ姿がそこには有りました。

〈欲張り権造〉と誰も呼ばなくなった頃、権造はある事を思いつきました。

「鴉天狗の里のように、村の皆が集まって楽しく唄ったり踊ったり、笑い合える場所が欲しいだ
」

村の神社の神主様に相談すると、

「皆が花見をしながら集える、桜の並木を造ってみてはどうか」と言います。

それは名案と、権造は大喜び。

さっそく、その翌日から桜の並木作りが始まりました。

野良仕事や村の手伝いが終わって、手が空いた時に、桜の苗木を少しずつ植えるのです。

来る日も来る日も、権造は村人達の笑顔を見る為に働き、桜の苗木も少しずつ増えていきました。

やがて権造が歳をとり、皆に慕われ村の長となった頃、少しずつ植えた桜の苗木は、見事な桜の並木となり〈権造桜〉と呼ばれるようになりました。

毎年春になると満開の権造桜の下で、村人達は楽し気に語り、唄い踊るのです。

その中には勿論の事、村人達の幸せそうな笑顔を見て満足げに微笑む、権造の姿も有りました。

権造が天命を迎えた日、

「オラあ、まあまあだ、皆の笑顔が欲しいだよ……。オラあ、村一番の欲張り者だからな……」

そう言うと権造は、村人達の笑顔が良く見えるよう、自分の墓を権造桜の側に造るようと、遺言を残しました。

今年もまた満開の権造桜の下で、笛太鼓の音と共に、村人達の楽し気な笑い声と笑顔が溢れています。

枝が風にそよいで桃色の花びらが空に舞うと、権造の墓の上にも、はらはらと舞い落ちていきます。

穏やかに時が過ぎてゆくこの村を、

どこの誰よりも欲張りな権造が、

もっともっと、村人達の幸せの笑顔が欲しいと、

ずっと、そこから見守り続けるのです。